第二回 学習院大学 身体表象文化学会大会

第一部　研究発表

第二部　パネル・ディスカッション

「高畑勲とは何者だったのか？
―漫画映画（アニメーション）の志、その全体像に近づくために―」

2018. 7/7 土

学習院大学 西5号館303室

主催｜学習院大学身体表象文化学会　共催｜学習院大学文学会

大会プログラム 於：学習院大学西5号館 303教室

12:30-13:30 **総会**（会員のみ）

14:00-16:45 **研究発表**（発表：25分 質疑応答：10分）

開会の挨拶　兼宗朋史（博士後期課程）

研究発表1（14:00-14:35）

アントナン・アルトーにおける方法意識

発表：中里昌平（博士前期課程）

司会：岡村正太郎（博士後期課程）

研究発表2（14:40-15:15）

映画音楽研究

―小津安二郎『秋日和』における劇伴音楽を手がかりに―

発表：兼宗朋史（博士後期課程）

司会：樋口賢和（博士前期課程修了）

研究発表3（15:30-16:05）

「百合」におけるカップリング類型

―ボーイズ・ラブとの比較を通して―

発表：田原康夫（博士前期課程修了）

司会：高石凌馬（博士前期課程）

研究発表4（16:10-16:45）

連帯のファンカルチャー

―「現場」からみる東京ライブアイドル・シーン―

発表：鈴木真吾（博士後期課程満期退学）

司会：柴田隆子（博士後期課程修了、学習院大学助教）

16:45-17:00 **休憩**（15 分）

17:00-19:00

パネル・ディスカッション

高畑勲とは何者だったのか？

―漫画映画（アニメーション）の志、その全体像に近づくために―

登壇者：

中条省平（学習院大学教授）

渡邉大輔（批評家・映画史研究者、跡見学園女子大学文学部専任講師）

鷲谷花（映画史研究者、大阪国際児童文化振興財団特別専門員）

司会：三輪健太朗（博士後期課程満期退学、マンガ研究者、東京工芸大学ほか非常勤講師）

閉会の挨拶　岡村正太郎（博士後期課程）

19:30-21:30　**懇親会**（会員および同伴者のみ）

会場：マックスキャロット（東京都豊島区目白3-16-16、目白駅徒歩3分）

研究発表要旨

アントナン・アルトーにおける方法意識

発表：中里昌平（博士前期課程）
司会：岡村正太郎（博士後期課程）

本発表は、詩人で演出家のアントナン・アルトー（1896-1948）が書いた映画にかんするテクストを分析の対象とし、アルトーに固有のテーマ群と思われてきたものが、そのじつ間メディア的なかかわりのなかで涵養されたのではないかという仮説のもとに考察する。

アルトーは、自身の構想した演劇に「残酷演劇」の名を冠し、1960 年代に日本はもとより世界の演劇人に影響を及ぼしたが、しかしそれは他方で、分節言語の廃絶、肉体の恢復と現前、呪術的舞台の創出による始原的なものとの接触といったラディカルなコンセプトにより、しばしば「上演不可能な演劇」ともいわれてきた。なるほど確かに、直接性・無媒介性を過度に理想とする残酷演劇の構想は、きわめて観念的だといわざるをえない。またこのとき、先行研究の多くが演劇人アルトーに焦点化しすぎるあまり、それ以外の活動、たとえば映画人としての言動を捨象するきらいがあった。

よって本発表では、近年のメディア論や映画理論、とりわけジェイ・デイヴィッド・ボルターらによるニューメディア研究、およびスティーヴン・シャヴィロに代表される身体論的転回以降の映画研究を踏まえることで、残酷演劇――その上演（不）可能性の是非はさておくにしても――にこれまでとは異なる方法意識を見いだすことを試みる。実際、1920 年代には映画についての理論的なエッセイをも記したアルトーは、しかし後に「映画の早すぎる老衰」を主張するに至り、その直後から残酷演劇の構想を本格化する。このような間メディア的な問題系をアルトーに探ることが本発表の目的である。

映画音楽研究

―小津安二郎『秋日和』における劇伴音楽を手がかりに―

発表：兼宗朋史（博士後期課程）

司会：樋口賢和（博士前期課程修了）

小津安二郎作品における劇伴音楽を具体的に検証した研究は少ない。彼の作品における劇伴音楽は、明るい調性の同一曲が全編で反復するという説明でもって特徴づけられることが多い。さらに、映像の意味内容とはあえて合致しない曲調を採用しているという指摘は多く、作曲者である齋藤高順自身も、映像にあえて反する楽曲を採用することで、より画面の緊張感を高めていると語っている。こうした特徴は、小津の全作品の中で、とりわけ齋藤とタッグを組んだ全盛期における特徴でしかないが、他の作曲家以上に齋藤の登板回数が多いため、小津映画の音楽といえば彼の音楽を連想することが多いのだろう。しかもその音楽は、「小津調」を決定づける重要な要素であるとまで言われている。

では、果たして、齋藤の音楽はどのように「小津調」と呼ばれる、小津映画のムードの形成に貢献したのか。従来の研究では、先述のように、曲調の問題であるという抽象的な検証に終わることがほとんどであった。「画面に合っている／合っていない」という言及も印象論的な曖昧なものでしかない。

そこで本研究では、曲調という抽象的な議論に終始してきた小津映画の劇判音楽を、映像とどの様に関わっているのかという具体的な検証に足を踏み入れることで、今一度再考してみたい。つまり、映像に対して音楽がどのタイミングで挿入され、また、どの程度の音量で演奏されているのかといった、映像と音楽を常に並行で考える作業をしたい。特に『秋日和』に使用されている劇判音楽に注目し、その音楽の効果が、いかに映画全体に波及し、「小津調」を彩っているかを論じることにする。

「百合」におけるカップリング類型

―ボーイズ・ラブとの比較を通して―

発表：田原康夫（博士前期課程修了）

司会：高石凌馬（博士前期課程）

女性同士のさまざまな関係性を描くマンガ・アニメのジャンルである「百合」は、「ガールズ・ラブ」とも呼ばれているように、男性同士の関係性を描く「ボーイズ・ラブ」と類同的なジャンルとして捉えられている。しかし、「ボーイズ・ラブ」に関しては国内外を問わずさまざまな研究や批評が行われる一方で、「百合」に関するそのような試みは乏しく、したがって両ジャンルを比較した研究もほとんど存在していない。

本研究は、1.百合ジャンルのマンガ作品を広範に分析することで、ジャンルの慣習=「お約束」を可視化し、2.「ボーイズ・ラブ」や、その母体となったジャンルである「やおい」を扱う先行研究の成果を活用しながら、両ジャンルの比較を行う。

分析にあたっては、「カップリング」概念に軸足を置く。この概念は、本来は、マンガ・アニメ作品のファンが男性キャラクター間に同性愛関係を「捏造」するときの組み合わせを意味するものだが、現在はキャラクターの「対」関係を示す語彙として「百合」「ボーイズ・ラブ」の両ジャンルに広く流通している。

先行研究やファンの言説が示すように、「ボーイズ・ラブ」や「やおい」ジャンルにおいては、「対」を構成する二人のキャラクターがどのように特徴付けられるか、という問題が極めて重要視されている。言いかえれば、このジャンルにおいては、単体のキャラクターをどのように「立たせる」かどうかではなく、キャラクターの「対」をいかにして魅力的なものとして提示するかが賭け金とされているのである。そして、「カップリング」という言葉が現に使用されている以上、「百合」においてもこの価値観そのものは通底していると考えられる。

量的な調査をもとに「百合」における「カップリング」の類型を示し、「ボーイズ・ラブ」におけるそれらと比較することによって、「百合」ジャンルの核心を明らかにするとともに、類同的にとらえられている両ジャンルの相違点をも明らかにすることを試みる。

連帯のファンカルチャー

―「現場」からみる東京ライブアイドル・シーン―

発表：鈴木真吾（博士後期課程満期退学）

司会：柴田隆子（博士後期課程修了、学習院大学助教）

本発表ではAKB48の市場的な成功を背景に2005年の後半から隆盛をみせるライブアイドル文化におけるジェンダー関係、ファンカルチャーなどを中心に取り上げる。

主な先行研究としてはご当地アイドルを起用した地域振興の分析と大都市圏との比較など、ライブアイドル文化をマクロな視点で取り上げたものがあり、本研究では東京近郊を拠点にしたフィールドワークを基に、パフォーマーとファンの連帯を軸として形成されるファンカルチャーや、都市の性質が反映されるライブ会場の特色や地理的分布などから、東京におけるライブアイドル文化の一側面を分析する。

アイドルが女性であり、ファンの大半が男性であるという構造はマスメディアや音楽商品市場を主な活動拠点にする主流のアイドルと同様だが、「現場」（ライブやイベント等を指すファン用語）を活動の中心に位置づけるライブアイドルは、アイドルとファンとの物理的・精神的距離が近く、ファン同士も濃密な交流関係を結び、ホモソーシャルな連帯が形成されている。祝祭的空間ともいうべきライブ会場に見られる「ヲタ芸」や「コール」といったファンの儀礼的行為にはその連帯性が強く表れているが、「現場」への参与経験から、規範を重視する主流のアイドルに比べ自由な活動が可能なライブアイドルは、パフォーマンスやSNSを介した情報発信といった諸実践を通じて主流とは異なるアイドル像を打ち出す可能性があると考える。

パネル・ディスカッション

高畑勲とは何者だったのか？

―漫画映画（アニメーション）の志、その全体像に近づくために―

【趣旨説明】

去る 2018 年 4 月にアニメーション監督の高畑勲氏が亡くなった。本学会の母体である身体表象文化学専攻の創立に寄与された――「映像芸術と身体表象メディア」という共同研究に主任研究員として 3 年近くにわたって携わり、また、大塚康生氏との共同講演会などにも登壇された――そのような所縁ある人物の死は、本学会員のあいだでもおのずと話題になった。その死がきっかけとなったことはむろん本意ではないにしても。

ところで、はたして私たちは高畑勲のことをどれだけ知っているといえるのだろうか。『太陽の王子 ホルスの大冒険』『アルプスの少女ハイジ』『火垂るの墓』ほかの監督・演出家であり、宮崎駿の師であると同時にライバルでもあった彼について、私たちはもちろん知っていると答えるであろう。しかし、宮崎にかんする研究や批評にくらべて、高畑を対象とする言説は圧倒的に少なく、その仕事の全貌が明らかにされてきたとはいいがたい。

よく知られるのは、『やぶにらみの暴君』（『王と鳥』）や絵巻物をつうじたアニメーション研究だが、そればかりでなく、上記前者の脚本を手がけたジャック・プレヴェールについての卒業論文以来の研究とその集大成である『ことばたち』（*Paroles*）の本邦初完訳、ユーリ・ノルシュテインやフレデリック・バックらといった世界のアニメーション作家の紹介、そして左翼知識人としての活動など、彼の関心はさまざまな領域に向けられていた。

このたび本学会では、ジェンダー論や大衆文化史の視点からスタジオジブリ作品についての考察も試みている映画史研究者・鷲谷花氏と、スタジオジブリ論を構想しているという気鋭の批評家・渡邉大輔氏をお招きするとともに、広範におよぶ話題で高畑と対話を重ねてきた本学教授・中条省平氏もまじえた公開討論会を開催する。フロアにも問いかけることをとおして活発な議論を交わし、その全体像にすこしでも近づく機会としたい。

（文責：学習院大学身体表象文化学会 大会実行委員会）

【登壇者コメント】

プレヴェールと高畑勲

中条省平

高畑勲の卒業論文は、フランスの詩人プレヴェールの作品を主題としていました。また、彼はプレヴェールが脚本を書いたアニメ映画『やぶにらみの暴君』を見なければアニメーションの道へ進むことはなかった、とも断言しています。つまり、高畑勲というアニメーション作家にとって、プレヴェールはその思想的バックボーンを提供した文学者であると考えることが可能でしょう。

後年、プレヴェールの詩を日本語に翻訳してそのアンソロジーを作ったとき、高畑勲はその本の題名に『鳥への挨拶』というプレヴェールの言葉を選びました。また、別の場所で、プレヴェールの鳥を歌った詩はすべて傑作だ、と言い切っています。さらに、『やぶにらみの暴君』の改作である『王と鳥』について精細な研究書を書いています。この鳥への執着には何か意味があるのでしょうか？

プレヴェールの鳥のイメージの受容を通して、高畑勲の思想的背景の一面を浮き彫りにできれば、と思っています。

――――――――――――――――――――

中条省平（ちゅうじょう・しょうへい）
1954 年生まれ。学習院大学文学部教授。パリ大学文学博士。主な著書に『反＝近代文学史』『フランス映画史の誘惑』、翻訳にバタイユ『マダム・エドワルダ／目玉の話』、コクトー『恐るべき子供たち』など。

――――――――――――――――――――

高畑勲の「リアリズム」再考

―アナログ/デジタル、実写/アニメーションの狭間で

渡邉大輔

高畑勲が映像作品における理論、実作の双方ともに、徹底して「リアリズム」を志向した作家だったことは広く知られている。とはいえ、『柳川掘割物語』のような実写ドキュメンタリーと数多くのアニメーション作品、そしてセルアニメーション表現や『十二世紀のアニメーション』の絵巻分析のようなアナログ表現の開拓、言説から後期のデジタル作画表現の挑戦にいたるまで、領域横断的な高畑の仕事や思想の中で、彼の言う「リアリズム」の多層性はなお検討の余地を残していると思われる。むろん、この大きな問いに満足に答えることは困難だが、本発表では、主に高畑の絵巻物分析や晩年のデジタル表現を用いた作品群、そして高畑も影響を受けたというアンドレ・バザンのリアリズム論をめぐる近年の研究などを参照しながら、その多彩な業績とともに複数の位相が重なり合う、高畑リアリズムの内実を試論的に検討してみたい。また、それによって、デジタル化に伴う今日の映像文化、あるいは時に「拡張現実」とも呼ばれる現代のリアリティの考察に高畑的なリアリズムが与える示唆を展望してみたい。

――――――――――――――――――――

渡邉大輔（わたなべ・だいすけ）
批評家・映画史研究者。跡見学園女子大学文学部専任講師。専攻は日本映画史・映像文化論・メディア論。著作に『イメージの進行形』（人文書院）、共著に『1990 年代論』（河出書房新社）『映画監督、北野武。』（フィルムアート社）『リメイク映画の創造力』（水声社）『日本探偵小説を知る』（北海道大学出版会）など多数。2016 年 1 月より、メールマガジン『ゲンロンβ』で「ポスト・シネマ・クリティーク」を連載中（ゲンロンより単行本化予定）。
――――――――――――――――――――

『太陽の王子 ホルスの大冒険』による 1950 年代左翼文化運動の継承

鷲谷花

高畑勲は「左翼」であり、その演出作品も「左翼的」であるとの言説はすでに山積しているが、その多くは漠とした印象論にとどまり、「左翼的」とは具体的にどういうことなのか、歴史的な文脈を踏まえて検証した先行研究はいまだに乏しい。本発表では、高畑の演出による長篇劇場作品第一作『太陽の王子 ホルスの大冒険』（東映、1968 年）の原案となった人形座の民話人形劇『春楡〔チキサニ〕の上に太陽』が、1950 年代の国民的歴史学運動に直接関連する作品であったことに注目し、「アメリカ帝国主義への隷属」からの「民族独立」「民族解放」を革命の任務として掲げた日本共産党の「五一年綱領」の世界観が、共産党主流派の歴史学者・学生を中心とする大衆的学術運動として開始された国民的歴史学運動を経由して、紆余曲折を経つつ『ホルス』へと継承されるプロセスを解明する。また、東映系列館での通常の興行は失敗だったとされる『ホルス』が、主に全国の映画サークルの主宰する自主上映会で多くのファンを獲得した過程についても検証を試み、占領初期に日本共産党の指導によって開始された組織的大衆運動としての映画サークル運動が、国産アニメーションのファンダム形成にも関わったという忘却された起源についても再考する。
――――――――――――――――――――

鷲谷花（わしたに・はな）
大阪国際児童文学館特別専門員。専門は映画学、日本映像文化史。共編著書として『淡島千景 女優というプリズム』（淡島千景、坂尻昌平、志村三代子、御園生涼子と共編著、青弓社、2009 年）ほか。近年は昭和期の幻灯（スライド）に関する調査研究及び上映活動にも取り組んでいる。
――――――――――――――――――――

【司会者紹介】

三輪健太朗（みわ・けんたろう）

1986 年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程満期退学。現在、日本学術振興会特別研究員 PD／東京工芸大学ほか非常勤講師。著書に『マンガと映画―コマと時間の理論』（NTT 出版、2014 年）、共著書に『マンガ視覚文化論―見る、聞く、語る』（水声社、2017 年）など。